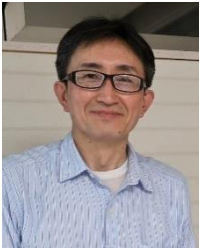




[令和 4 年 7 月 13 日 定例会発表要旨]

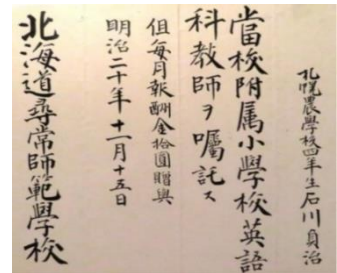
## 「手稲鉾山」の名付け親とされる石川貞治の知られざる足跡 (1)

ご子孫 (石川貞治の曾孫) 石川 成 昭 氏



「手稲鉾山」における石川貞治の登場は、『札幌市史』をはじめとする既出文献によると、「大正 5 年より石川貞治が試掘権を得て着手」とあります。しかし、これは私たち一族の認識とは異なります。また、ウェブ上の「ウィキペディア」の石川貞治の項についても 錯誤のある内容が気になっていました。そこで、今回の手稲郷土史研究会の発表では、手稲の鉾山を手掛けた前後 (経緯) を含む石川の生涯についてお話をさせていただきました。以下、その要約をお示しします。

石川は、元治元 (1864) 年、石見国浜田 (現在の島根県浜田市) で生まれ、2 歳で第二次長州征伐により美作国 (現在の岡山県東北部) に移り、小学校卒業後、大阪英語学校を経て、大阪と岡山で教師の免許を取得。「札幌農学校」を目指し、官園のあった七重小学校 (現在の亀田郡七飯町) で一年余りの教師生活を経て、明治 17 (1884) 年に第 7 期生として農学校へ入学。1 年生のとき、OB や同級生とともに「北海英語学校」(のちの北海中学・現在の北海高校) の創立者となり、教師を兼任します。ところが、明治 20 (1887) 年、OB が異動等で札幌を去り、石川ほか教師陣も卒業を控えて英語学校は廃校の危機に瀕します。そのとき、同級生の岡元輔と二人で、札幌区長の浅羽靖に校長就任を懇願し (固辞を覆した)、同校は存続できたのだそうです。



北海英語学校と師範学校附属小の教師を兼任 (石川家所蔵史料)

明治 21 (1888) 年、卒業とともに石川は、北海道庁で新たな地質調査を担当します。同年入庁の地質担当には、ライマン門下生の坂市太郎 (夕張大露頭の発見者) や、東大卒の神保小虎がいました。新たな地質鉾物調査は神保を主任とし、10 年以上前のライマンらの地質調査に基づかない調査を指します。これが坂市太郎との大論争の原因となりました。北海道庁には 8 年在職し、神保らの異動後に「北海道鉾物調査報文」及び「鉾産分布図」をまとめました。明治 25 (1892) 年以降は農学校助教授を兼任し、地質学を担当。このとき、のち共に仕事をする農学生 小川二郎 (札幌興農園・五番館創立者) と出会います。小川は、卒論で大規模農場経営の企画を記し、兄一族を明治 25 (1892) 年に由仁に入植させたほか、同 40 (1907) 年頃には軽川で町村金弥の所有地を借り、



明治 20 年代前半撮影 新たな地質調査メンバー  
写真左より 横山壮次郎・石川貞治・神保小虎  
(出典: 石炭時報)

大規模な牧草栽培を開始するなど、手稲にも関係があります。

明治 26 (1893) 年の地質雑誌に、手稲に関して、「ハツサム川の奥には鉾物の存在を唱道するものあれども未だ採掘するに足るべきものの発見なし」とあります。鳥谷部彌平治がこの頃から手稲の金を手掛けたことと関連しそうですが、金の存在までは承知していなかった可能性が高そうです。同 27 (1894) 年には道内及び千島列島への調査へ赴きました。その際の、白瀬轟らの越冬隊の悲劇の状況や、アイヌの道案内とともに十勝から層雲峡への山越えをした写真が道庁の資料として保管されています。



明治 35 年頃撮影  
IOC 技師のマクレデー一家とともに 石川貞治は後列  
(石川家所蔵写真)

日清戦争後に拓殖務省が新設され、北海道庁長官だった北垣国道が次官となります。懇意だった石川は明治 29 (1896) 年春に同省に転じ、台湾や大陸の地質調査を担当しました。同省は 1 年で廃省となったため、石川は官職を辞し、前述の小川二郎とともに北海道鉱農商議館(鉱業農業のコンサルタント業)を設立し、三井や三菱等の代理店として一番の盛業時期を迎えます。

農畜産業で知られるエドウィン・ダンらが本州で設立した「インターナショナル・オイル・カンパニー」(IOC)による石狩油田との関係もこの頃からです。のち同社社員(札幌総顧問)となり、明治 40 年代にかけて石狩や厚真で油田開発を進めました。

IOC の本州の事業は明治 38 (1905) 年に撤退しますが、有望視された厚真の油田は石川が継承し、油田のあるウクル(宇隆)の土地を、牧場目的で払い下げを受け、由仁に入植していた石川の弟一家を移転させました。牧場と油田開発を兼ねていたと思われます。しかし、油田はうまくいかず、同 44 (1911) 年に「日本石油」に売却して、厚真から撤退します。

一方、明治 40 年代に入ると、エドウィン・ダンらの協力を得て、同 41 (1908) 年以降に島牧泊川の石灰鉱山や、幌向炭鉱合資会社(その後の朝日炭鉱)を設立し、同 42 (1909) 年 4 月には手稲で 51 万坪の金銀銅の試掘権を取得しています(札幌鑛山監督署管内 鑛區一覽)。それから 3 年後の同 45 (1912) 年 7 月には手稲で 64 万坪の試掘権とあり、上記を拡張した様子が窺えます。鳥谷部による採掘が同 40 (1907) 年頃までとされることから、その後を引き継いだ可能性も考えられます。また、明治 45 (1912) 年には、北樺太油田を調査し、現地の写真とともにその有望性を記しています。

札幌鑛山監督署管内 鑛區一覽			
番號	年	町村	鑛種
五五五三〇	二	手稲	銅
五五五三二	二	手稲	銅
五五五三三	二	手稲	銅
五五五三四	二	手稲	銅
五五五三五	二	手稲	銅
五五五三六	二	手稲	銅
五五五三七	二	手稲	銅
五五五三八	二	手稲	銅
五五五三九	二	手稲	銅
五五五四〇	二	手稲	銅
五五五四一	二	手稲	銅
五五五四二	二	手稲	銅
五五五四三	二	手稲	銅
五五五四四	二	手稲	銅
五五五四五	二	手稲	銅
五五五四六	二	手稲	銅
五五五四七	二	手稲	銅
五五五四八	二	手稲	銅
五五五四九	二	手稲	銅
五五五五〇	二	手稲	銅
五五五五一	二	手稲	銅
五五五五二	二	手稲	銅
五五五五三	二	手稲	銅
五五五五四	二	手稲	銅
五五五五五	二	手稲	銅
五五五五六	二	手稲	銅
五五五五七	二	手稲	銅
五五五五八	二	手稲	銅
五五五五九	二	手稲	銅
五五五六〇	二	手稲	銅
五五五六一	二	手稲	銅
五五五六二	二	手稲	銅
五五五六三	二	手稲	銅
五五五六四	二	手稲	銅
五五五六五	二	手稲	銅
五五五六六	二	手稲	銅
五五五六七	二	手稲	銅
五五五六八	二	手稲	銅
五五五六九	二	手稲	銅
五五五七〇	二	手稲	銅
五五五七一	二	手稲	銅
五五五七二	二	手稲	銅
五五五七三	二	手稲	銅
五五五七四	二	手稲	銅
五五五七五	二	手稲	銅
五五五七六	二	手稲	銅
五五五七七	二	手稲	銅
五五五七八	二	手稲	銅
五五五七九	二	手稲	銅
五五五八〇	二	手稲	銅
五五五八一	二	手稲	銅
五五五八二	二	手稲	銅
五五五八三	二	手稲	銅
五五五八四	二	手稲	銅
五五五八五	二	手稲	銅
五五五八六	二	手稲	銅
五五五八七	二	手稲	銅
五五五八八	二	手稲	銅
五五五八九	二	手稲	銅
五五五九〇	二	手稲	銅
五五五九一	二	手稲	銅
五五五九二	二	手稲	銅
五五五九三	二	手稲	銅
五五五九四	二	手稲	銅
五五五九五	二	手稲	銅
五五五九六	二	手稲	銅
五五五九七	二	手稲	銅
五五五九八	二	手稲	銅
五五五九九	二	手稲	銅
五五六〇〇	二	手稲	銅
五五六〇一	二	手稲	銅
五五六〇二	二	手稲	銅
五五六〇三	二	手稲	銅
五五六〇四	二	手稲	銅
五五六〇五	二	手稲	銅
五五六〇六	二	手稲	銅
五五六〇七	二	手稲	銅
五五六〇八	二	手稲	銅
五五六〇九	二	手稲	銅
五五六一〇	二	手稲	銅
五五六一一	二	手稲	銅
五五六一二	二	手稲	銅
五五六一三	二	手稲	銅
五五六一四	二	手稲	銅
五五六一五	二	手稲	銅
五五六一六	二	手稲	銅
五五六一七	二	手稲	銅
五五六一八	二	手稲	銅
五五六一九	二	手稲	銅
五五六二〇	二	手稲	銅
五五六二一	二	手稲	銅
五五六二二	二	手稲	銅
五五六二三	二	手稲	銅
五五六二四	二	手稲	銅
五五六二五	二	手稲	銅
五五六二六	二	手稲	銅
五五六二七	二	手稲	銅
五五六二八	二	手稲	銅
五五六二九	二	手稲	銅
五五六三〇	二	手稲	銅
五五六三一	二	手稲	銅
五五六三二	二	手稲	銅
五五六三三	二	手稲	銅
五五六三四	二	手稲	銅
五五六三五	二	手稲	銅
五五六三六	二	手稲	銅
五五六三七	二	手稲	銅
五五六三八	二	手稲	銅
五五六三九	二	手稲	銅
五五六四〇	二	手稲	銅
五五六四一	二	手稲	銅
五五六四二	二	手稲	銅
五五六四三	二	手稲	銅
五五六四四	二	手稲	銅
五五六四五	二	手稲	銅
五五六四六	二	手稲	銅
五五六四七	二	手稲	銅
五五六四八	二	手稲	銅
五五六四九	二	手稲	銅
五五六五〇	二	手稲	銅
五五六五一	二	手稲	銅
五五六五二	二	手稲	銅
五五六五三	二	手稲	銅
五五六五四	二	手稲	銅
五五六五五	二	手稲	銅
五五六五六	二	手稲	銅
五五六五七	二	手稲	銅
五五六五八	二	手稲	銅
五五六五九	二	手稲	銅
五五六六〇	二	手稲	銅
五五六六一	二	手稲	銅
五五六六二	二	手稲	銅
五五六六三	二	手稲	銅
五五六六四	二	手稲	銅
五五六六五	二	手稲	銅
五五六六六	二	手稲	銅
五五六六七	二	手稲	銅
五五六六八	二	手稲	銅
五五六六九	二	手稲	銅
五五六七〇	二	手稲	銅
五五六七一	二	手稲	銅
五五六七二	二	手稲	銅
五五六七三	二	手稲	銅
五五六七四	二	手稲	銅
五五六七五	二	手稲	銅
五五六七六	二	手稲	銅
五五六七七	二	手稲	銅
五五六七八	二	手稲	銅
五五六七九	二	手稲	銅
五五七八〇	二	手稲	銅
五五七八一	二	手稲	銅
五五七八二	二	手稲	銅
五五七八三	二	手稲	銅
五五七八四	二	手稲	銅
五五七八五	二	手稲	銅
五五七八六	二	手稲	銅
五五七八七	二	手稲	銅
五五七八八	二	手稲	銅
五五七八九	二	手稲	銅
五五七九〇	二	手稲	銅
五五七九一	二	手稲	銅
五五七九二	二	手稲	銅
五五七九三	二	手稲	銅
五五七九四	二	手稲	銅
五五七九五	二	手稲	銅
五五七九六	二	手稲	銅
五五七九七	二	手稲	銅
五五七九八	二	手稲	銅
五五七九九	二	手稲	銅
五五八〇〇	二	手稲	銅
五五八〇一	二	手稲	銅
五五八〇二	二	手稲	銅
五五八〇三	二	手稲	銅
五五八〇四	二	手稲	銅
五五八〇五	二	手稲	銅
五五八〇六	二	手稲	銅
五五八〇七	二	手稲	銅
五五八〇八	二	手稲	銅
五五八〇九	二	手稲	銅
五五八一〇	二	手稲	銅
五五八一一	二	手稲	銅
五五八一二	二	手稲	銅
五五八一三	二	手稲	銅
五五八一四	二	手稲	銅
五五八一五	二	手稲	銅
五五八一六	二	手稲	銅
五五八一七	二	手稲	銅
五五八一八	二	手稲	銅
五五八一九	二	手稲	銅
五五八二〇	二	手稲	銅
五五八二一	二	手稲	銅
五五八二二	二	手稲	銅
五五八二三	二	手稲	銅
五五八二四	二	手稲	銅
五五八二五	二	手稲	銅
五五八二六	二	手稲	銅
五五八二七	二	手稲	銅
五五八二八	二	手稲	銅
五五八二九	二	手稲	銅
五五八三〇	二	手稲	銅
五五八三一	二	手稲	銅
五五八三二	二	手稲	銅
五五八三三	二	手稲	銅
五五八三四	二	手稲	銅
五五八三五	二	手稲	銅
五五八三六	二	手稲	銅
五五八三七	二	手稲	銅
五五八三八	二	手稲	銅
五五八三九	二	手稲	銅
五五八四〇	二	手稲	銅
五五八四一	二	手稲	銅
五五八四二	二	手稲	銅
五五八四三	二	手稲	銅
五五八四四	二	手稲	銅
五五八四五	二	手稲	銅
五五八四六	二	手稲	銅
五五八四七	二	手稲	銅
五五八四八	二	手稲	銅
五五八四九	二	手稲	銅
五五八五〇	二	手稲	銅
五五八五一	二	手稲	銅
五五八五二	二	手稲	銅
五五八五三	二	手稲	銅
五五八五四	二	手稲	銅
五五八五五	二	手稲	銅
五五八五六	二	手稲	銅
五五八五七	二	手稲	銅
五五八五八	二	手稲	銅
五五八五九	二	手稲	銅
五五八六〇	二	手稲	銅
五五八六一	二	手稲	銅
五五八六二	二	手稲	銅
五五八六三	二	手稲	銅
五五八六四	二	手稲	銅
五五八六五	二	手稲	銅
五五八六六	二	手稲	銅
五五八六七	二	手稲	銅
五五八六八	二	手稲	銅
五五八六九	二	手稲	銅
五五八七〇	二	手稲	銅
五五八七一	二	手稲	銅
五五八七二	二	手稲	銅
五五八七三	二	手稲	銅
五五八七四	二	手稲	銅
五五八七五	二	手稲	銅
五五八七六	二	手稲	銅
五五八七七	二	手稲	銅
五五八七八	二	手稲	銅
五五八七九	二	手稲	銅
五五八八〇	二	手稲	銅
五五八八一	二	手稲	銅
五五八八二	二	手稲	銅
五五八八三	二	手稲	銅
五五八八四	二	手稲	銅
五五八八五	二	手稲	銅
五五八八六	二	手稲	銅
五五八八七	二	手稲	銅
五五八八八	二	手稲	銅
五五八八九	二	手稲	銅
五五九〇〇	二	手稲	銅
五五九〇一	二	手稲	銅
五五九〇二	二	手稲	銅
五五九〇三	二	手稲	銅
五五九〇四	二	手稲	銅
五五九〇五	二	手稲	銅
五五九〇六	二	手稲	銅
五五九〇七	二	手稲	銅
五五九〇八	二	手稲	銅
五五九〇九	二	手稲	銅
五五九一〇	二	手稲	銅
五五九一一	二	手稲	銅
五五九一二	二	手稲	銅
五五九一三	二	手稲	銅
五五九一四	二	手稲	銅
五五九一五	二	手稲	銅
五五九一六	二	手稲	銅
五五九一七	二	手稲	銅
五五九一八	二	手稲	銅
五五九一九	二	手稲	銅
五五九二〇	二	手稲	銅
五五九二一	二	手稲	銅
五五九二二	二	手稲	銅
五五九二三	二	手稲	銅
五五九二四	二	手稲	銅
五五九二五	二	手稲	銅
五五九二六	二	手稲	銅
五五九二七	二	手稲	銅

## 「手稲鉱山」の名付け親とされる石川貞治の知られざる足跡(2)

ご子孫(石川貞治の弟 石川寛治の曾孫) 高張稔晴氏

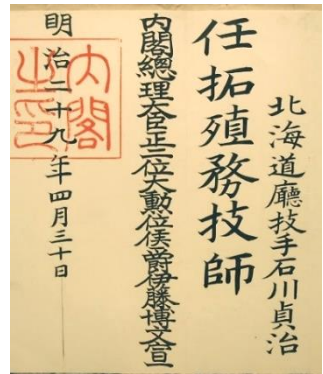
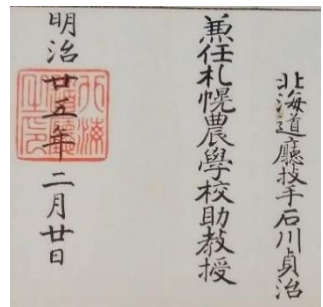


「元北海道庁技師 石川貞治は手稲鉱山の名付け親」は、はたして本当か——。石川貞治が手稲山に設定したのは「試掘鉱区」で、もともと鉱山名の登録はありません。一方、手稲山で最初に鉱区を設定した鳥谷部彌平治の「採掘鉱区」では、鉱山名を「稲嶽」と登録しています。試掘鉱区は採掘鉱区と異なり、鉱山名の登録がなかったことから、『手稲鉱山史』※に「大正五年九月 元北海道廳技師 石川貞治 手稲鑛山ト稱シテ 再ビ開發 二手ヲ染メ」とあったところを、「手稲鉱山の名付け親」と解されたようです。間違いではありませんが、多少実態と異なっているかも知れません。石川が開発に着手したという時期も、この記述から伝わったものと思われる。

また、「元北海道庁技師」については、道庁退職後に転出した拓殖務省において明治29(1896)年、高等官(内閣総理大臣により任命)の辞令を受けて「拓殖務技師」に任官しており、道庁においては判任官(道庁長官により任命)の「技手」として、道庁が本務で、札幌農学校助教授を兼ねていました。このことから、「道庁技手 兼 札幌農学校助教授」が正しいこととなります。なお、『明治二十二年四月一日調 北海道廳職員録』には石川貞治の月俸は40円と記載されており、当時の戸長役場の戸長の月俸が15円程度であることから、「技手見習」とはいえ、当時としてはかなりの「高給」であったと考えられます。

さて、私は石川貞治の弟、寛治(五男)の曾孫に当たり、最近まで手稲区に住んでいましたが、区のホームページにある「石川貞治」が同じ家系であるとは、当初は思いもしませんでした。経済的にも安定していた石川が、兄弟一家を岡山から新天地 北海道へ呼び寄せたのでしょう。

今から40年程前、「石川一族の家系図を作っていた人(成昭氏の父)が事故で亡くなり、家系図ができなくなった」と聞きましたが、その記憶の断片を私たち息子の世代が引き継ぎ、家系図の作成に合わせて「一族の記憶を辿った」結果として資料をまとめました。今回、手稲郷土史研究会の

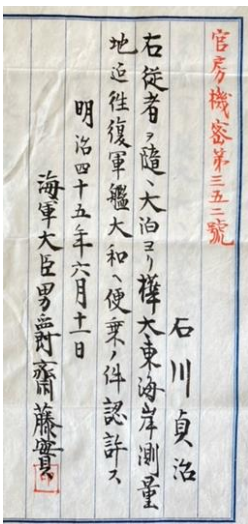


技手から技師へ(石川家所蔵史料)

皆さんに発表の場をいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。「手稲鉱山の名付け親」というのは石川貞治本人も少し照れると思いますが、子孫としては、「名誉なことだし、まあ、いいか」と感じております。

現在、ロシアのウクライナ侵攻により、わが国が持つ『サハリン2』のガス田の権益について報道されることが多くなりました。石川は、明治45(1912)年7月、海軍の海防艦『大和』(初代)に乗船し、当時の日露の国境である北緯50度線を越え、プロジェクトの中心地であるチャイウォ、ヌトウォなどを調査し、報告書にまとめた最初の日本人であることから、一層感慨深いものがあります。

※『手稲鉱山史(昭和十四年十二月末日迄)』は北海道大学に収蔵されていますが、北海道立地下資源調査所の職員が複製を寄贈したものであるらしく、原本の所在は不明です。



機密の「北樺太調査」の命 北方定期航路の企画書(昭和初期)  
(いずれも石川家所蔵史料)



## 【つれづれ随想】

## 私の“手稲式土器”制作記 ①

今年4月に手稲郷土史研究会へ入会してから、毎月の定例会での講演のほかに、先輩会員の方々からも手稲の歴史についてさまざまな興味深い情報を教えていただきました。

なかでも私がとくに惹かれたのが、新川周辺の「手稲遺跡」で発掘されたという縄文中期から縄文後期に属する“手稲式土器”。もともと縄文時代に興味を持っていたことに加え、この土器を昭和28（1953）年に発見した中学生が私と同じ苗字の方であったことから、より手稲式土器に対する探究・好奇心が湧きました。

手稲式土器についてインターネットで検索し、出てきた写真を見ると、鉢の形の表面に縄を押し付けて作られた文様のものや、細かな線刻がある深鉢型土器のほかにも、注ぎ口がついた注口土器も存在していることがわかりました。土器といえば、<sup>かえんがたどき</sup>火焰型土器というイメージを持っていた私にとって、注口土器の存在は目から鱗でした。



陶芸体験で使用した道具



土器の制作手順

手稲式土器の写真を見ているうちに縄文時代には手稲の地に土器職人がいたことに想いを馳せるようになり、「私も手稲式土器を手にしてみたい…。いや、作ってみたい!」と思い立ちました。そこで、手稲本町2条4丁目の『パン屋喫茶 大和』さんにて毎月開催されている「手稲にキテネ火曜カルチャー」の陶芸体験に参加し、素焼きのオリジナル(!)手稲式土器を制作してみることにしました。陶芸の先生も、興味を持ってご指導してくださいました。

インターネットで見つけたさまざまな土器の写真を参考に、いよいよ土器制作の開始です。

まずは、土器の底から。タタラ板と呼ばれる同じ厚さの板を置き、その上から延べ棒で薄い粘土を作ります(左写真・上)。タタラ板と切り針を用いて丸く粘土をカットすると、土器の底ができました(左写真・中)。次に底に沿って深鉢状にしていきます。細い棒状に練った粘土を重ね、粘土の接着を強めるために切り針で溝を作り、水で溶かした粘土=どべを塗りながら形成します(左写真・下)。さあ、次は、縄文土器らしいカタチ作りと文様付けです。〈つづく〉

岡和田 夢子 (手稲郷土史研究会 会員)



★日帰り研修ツアーのお誘い 手稲郷土史研究会のバスツアーを9月20日(火)、二年ぶりに実施します。視察先は、西区発寒を経由して北区篠路方面。参加費2,000円、定員30名(7月定例会で詳細案内済み)。8月12日(金)までに 当会研究部あて、氏名・住所・生年月日・連絡先を添えてお申し込みください。なお、今後の新型コロナウイルスの感染動向により中止となる場合もあります。

★「昭和の手稲」の写真を集めています 「手稲開村150周年記念事業」の一環として10月下旬からJR手稲駅自由通路「あいくる」にて開催予定の歴史パネル展で、“ちょっと昔の手稲”の写真を併せて展示します。ご家庭のアルバムの中に、昭和の街並や風俗は眠っていませんか。撮影年と撮影地に簡単な説明を添えて当会広報部へ写真をお貸しください。8月末日〆切。

次回定例会 ⇒ 発表内容「わが波乱万丈の人生を振り返って」／平木重雄(手稲郷土史研究会 会員)／

9月14日(水) 18:15～／手稲区民センター 3階 第五会議室 ※マスク着用・手指消毒のうえご参加ください。

手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第174号 令和4年8月10日発行

発行責任者:永井道允(手稲郷土史研究会 会長) 編集責任者:菅原純子

✦〒060-0808 札幌市北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ 2階 札幌市市民活動サポートセンター レターケースNo.277 手稲郷土史研究会

✦メールアドレス kyoudoshi\_teine2005@yahoo.co.jp ✦TEL 090-3381-4994 (担当:林)